

である。日本はすでに勝利の女神から完全に見放されていたのである。

十、十空襲の直前榑淵師団長は那覇の県立女学校で開かれた卅二軍兵団長会同に出席するため九日堀江専属副官をともなって那覇へ出張していた。この兵団長会同に出席した宮崎少将（在石垣島独混四十五旅団長）の回顧によると、この会同では敵来攻に備えて沖繩防衛の万全を期

すための兵棋演習が催され、席上軍の方針が示された。日時は十月十一日頃だったらしい。兵団長会同終了後十三日台湾へ向かう友軍機の大編隊に続行、途中宮古飛行場で一時着陸、燃料を補給したのち石垣島に帰任、榑淵師団長もこの日に帰任している。

第五章 敵来攻前に守将更迭

(1) 師団長、参謀長相次いで転出

二十年一月に入るやレイテ決戦は絶望的状态を来し、敵は九日あらたに比島リンガエン湾に上陸、南西諸島をめぐる状勢は一日と緊迫の度を増してきた。十九年十月十日、十一日の空襲以来大がかりの空襲は杜絶していたが、大型機による偵察、海上補給路攻撃は頻繁につづき官民の不安と焦燥感は一層高まってきた。

このような状況に於て突如として先島群島防衛の最高責任者である集団長（第二十八師団長）つづいて参謀長の更迭が発令され、作戦準備がようやく軌道に乗りつつある実情に副わない人事だとして奇異の感を与えた。

即ち第二十八師団長榑淵鎮一中将は一月十二日づけで在漢口第三十四軍司令官に、後任に台湾憲兵隊司令官納見敏郎中将がそれぞれ親補、次で二月一日付で参謀長福地春男少将が香港占領地総督部参謀長兼南支派遣軍参謀副長に、後任には広島師団参謀一瀬寿中佐（着任後大佐進級）が補職発令された。

栄転の榑淵中将は十六日朝九時専属副官堀江道徳大尉（福岡迄随行、

引き返して歩兵第三聯隊本部付となる）を帯同、参謀長を始め主だった部下らの見送りを受け、中飛行場を出発、空路那覇を経由福岡に向かった。

後任の納見中将は十六日午後一時空路台湾から着任、直ちに那覇へ向かい、第三十二軍司令官に申告、先島防衛についての任務を受けると共に作戦準備についての打ち合わせを行ない、沖繩ホテルに於て前任の榑淵中将より申し送りを受け、十七日正午帰任した。

陸軍の将官人事は原則として陸軍省人事局長が参謀本部総務部長と打ち合わせて原案を作り、三長官（陸相、参謀総長、教育総監）の同意を得てきめる仕組みになって居り、例外として現地司令官の意見具申（インパール作戦参加の師団長三名が軍司令官の強い希望で入れ替えられたのはその好例）による場合があるが、今度の先島集団長人事は天降り式に決まったもので、事前に第三十二軍や第十方面軍には何らの連絡、相談はなかったようだ。

普通一般的な考え方としては榑淵中将は昭和十六年進級の古参将官、序列上も軍司令官に出てもよい時期に来て居り、又当時戦線の拡大に伴なって軍の新設、改編が頻繁に行なわれている際でもあったので、順当な人事とみてよいが、決戦を目前にしての守将交替は必ずしも適切と

は云えない一面もあるようだ。後任の納見中将は十九年六月の進級、台湾憲兵隊司令官は通常少将職(?)だからそろそろ親補職である師団長転出の時期に来て居り、又同中将は歩兵出身、シベリヤ南支で実戦の経験も豊富、難戦を予測される孤島の防衛には適材という含みもあって且一刻もゆるがせに出来ない緊迫時、所在地が直ぐ赴任可能な台湾と云う点なども勘案されての人事ではないかと推測される。

参謀長の福地少将の栄転は師団参謀長が通常大佐職(たまには中佐、もしくは少将が充てられることもある)だから栄転は当然の人事だとみてよい。然し玉碎の危険にさらされている孤島に残される人々からすると当時もっとも安全地帯と目されている支那大陸への転出は一種の羨望の念を以て送られたことであろう。

然しこれは余談だが、榊淵、福地両将軍はツイてなかった。榊淵中将は二十年五月軍司令部の北鮮(威興)移動後敗戦を迎え、そのまま連軍に抑留されてシベリヤ送り、苦労を重ねた末、二十七年ようやく帰国、又福地少将は南支でのB29塔乗員処刑(二十年四月五日)の責めを問われて二十一年九月三日軍法廷第一審で死刑、翌二十二年二月三日死一等を減せられて終身刑に処せられ、巢鴨で服役中、二十八年十二月九日獄死すると云う悲運に遭った。陸路参謀の話では同少将はこの事件には直接関与して、前任者からの引き継いだ決裁書類にサインしただけだったが、敢て異議を申立てず服罪したと云う、若し仮に宮古で終戦を迎えたとしたら無事復員したことは間違いないだろう。(榊淵中将か福地少将か、何れかでも宮古島に残っていたら宮古島戦犯事件は避けられたのではないかと関係者の一致した見方である。)

なおこれらの一連の人事について第三十二軍高級参謀八原博通氏は戦後の回想で、作戦準備に背馳した遺憾極まるものであると述べている。

榊淵 一中将主要軍歴

明治二十三年東京都に生る、陸士二十四期騎兵科出身、海外駐在武官陸軍省高級副官、昭和十三年から二年間第一軍参謀長として石家荘、大

原地区の会戦に参加、十六年陸軍中将に進級、名古屋(第三)留守師団長を経て在満州ハルビン第二十八師団長に親補(前任は石黒貞蔵中将、のちの在マライ第二十九軍司令官)山下奉文大将の率いる第一方面軍(牡丹江)の隷下で北滿警備にあたったが、戦況急変により十九年七月宮古島に移動、先島集団長として先島群島の防衛を担任した。二十年一月十二日在漢口第三十四軍司令官に栄転、同年六月鮮満国境威興に移り、終戦を迎えたが、ソ連軍に抑留され、シベリヤに送られ、ニコリストク、ハバロフスクの将官収容所で過ごし、二十七年帰国した。

昭和十一年二月二十六日起きた軍隊の反乱事件に際しては高等軍法会議判士として事件の審理に参画、英語の造詣深く、円満温厚な人柄の持主だった。宮古島在任当時は作戦準備一切を福地参謀長に委せ、殆んど容かいしなかったと云われる。昭和三十九年九月二十日脳軟化症のため永眠した。最終官等は正四位勲二等功三級、女婿の理氏は東京地裁判事、三島由起夫事件を担当したことで著名。

福地春男少将主要軍歴

佐賀県出身で明治三十二年生。陸士第三十二期砲兵科出身、昭和二年陸大卒、参謀本部勤務、近衛師団参謀、イラン国駐在武官、大本営陸軍部参謀、ハルビン特務機関、関東軍情報本部員を経て昭和十五年大佐、十六年八月第二十八師団参謀長、十九年七月師団の移動に伴ない宮古島赴任、同八月一日付で少将進級、二十年二月南支へ転出した。陸大軍刀組の秀才、少壮将校時代桜会に加盟、国家革新運動に一役買ったこともある。

佐賀の葉隠精神の流れを汲み寡黙、参謀連の起案した決裁書類等欠陥があっても頭ごなしに怒鳴ることなく、自らサッサと書き直して済ませると云う式で、文章の旨さは定評があったと云う。

(註)これより先十九年十一月二十二日付で輜重兵第二十八連隊長横山伊一郎大佐が輜重兵学校長へ栄転(少将進級)師団獣医部長走尾中佐も獣医学校へ転出、宮古島を去っている。

横山大佐は第二十八師団の連隊長クラス的最古参、榊淵師団長とは陸士同期とも云われる。後任は宮川正少佐が命課された。又獣医部長の

後任は補充されず、宮田誠也獣医大尉が代理を勤めた。

第六章 敵機動部隊沖繩狙う

(1) 沖繩軍敵の新作戦警戒

宮古島に対する空襲は十月十日、十一日以来B24による偵察行動を除き殆んど杜絶していたが、二十年一月に入るや果然活発となってきた。小型機の来襲の外にマリアナ基地から超空の要塞B29が飛来、高々度から綿密な偵察飛行を繰り返して、宮古島に対する敵の関心が窺われた。一月以降の主なる空襲記録次の通り。

一月三日 艦載機若干 五日 // 二機 九日 // 十三日
大型機一機、飛行場及び船舶を攻撃
一月二十一日 四次にわたり延三十六機が来襲、船舶及び飛行場銃爆撃、我が方は地上砲火でその二機を撃墜
二十二日 午前七時十六分から午後四時迄の間延べ二十機が来襲、飛行場及び船舶を銃爆撃、地上砲火でその一機を撃墜、
このような頻繁な敵艦載機の来襲は敵の有力なる機動部隊が宮古島近海(台湾東方海上)に腰を落ちつけて南西諸島をネラっていることを意味し、状況は極度に緊迫してきた。

第三十二軍では一月二十二日午後五時三十分次のように発表した。この前後現地軍は敵上陸の虞れのあることを懸念していたようである。
本二十二日七時より十七時二十分頃迄敵艦載機延べ七四五機、数次に亘り南西諸島全域に來襲、銃爆撃す、我対空部隊の精銳はこれを迎撃し

し、左の戦果(沖繩本島のみ)を得たり。

撃墜四十五機、撃破三十八機、我が方の損害極めて軽微なり。
尚、機動部隊に輸送船団なし。

不安と緊迫づくうちに一月は過ぎ二月に入った。この頃は夜間の海上交通もB24などの大型機に妨害されて航行不能となり、宮古島は空海からの連絡を絶たれ、全くの孤立状態に陥った。目に見えない巨大な力がひしひしと迫ってくるような緊迫感が肌で感ぜられ、比島方面の戦況悪化とも俟って絶望的空氣が漲りつつあった。

果然内南洋ウルシー泊地に集結中の敵機動部隊は十日頃行動を始め、その動向は予断を許さないものがあつた。

これにつき第三十二軍は次のように発表、麾下全部隊に対し、警戒態勢を敵ならしめるよう命ずると共に官民の覚悟を促した。

(現地軍発表)昭和二十年二月十五日十二時太平洋前進基地を發した敵機動部隊は数日前より 行動を開始し、蠢動しあるものの如く、諸情勢を総合するに十六日以降我が南西諸島は警戒を要するものありこのあとの空襲状況については明確な資料がないが、八月十五日の終戦時まで多い日は延べ三百機が来攻、とくに沖繩攻略作戦が開始された三月廿三日からは英太平洋艦隊の艦載機をも加え毎日平均数十機を算え飛行場、港湾施設、民家などに莫大なる被害を与えた。

十月十日から終戦時までに来襲した敵機は
イ、戦斗を目的としたもの四、四五〇機